会報

有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平 1-8-5
TEL　0955-42-2466
HP　arita-sidankai.sub.jp/
arita-sidankai@hotmail.com

新型コロナウイルスの影響受け例会中断！

本年度は、大方の予想を裏切り新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化し、感染を避けるため予約していた新年度の食事会を直前で取り止めるスタートになった。

令和二年一月には、大橋先生を囲んでの食事会と講座でスタートしたのもつかの間、年度末の三月頃から感染拡大は急速に進み、「三密」を避けるため例会など屋内での会合を中止せざるを得なくなった。

三月末頃から東京・大阪など大都市圏でコロナの感染拡大が著しく進み、四月には七都道府県で緊急事態宣言が出されるなど、新型コロナウイルスの影響が全国に広がった。

町内においては第一一七回目となる五月の有田陶器市が取り止めになり、町内でのイベントも殆どが中止や延期となった。観光客は激減し札ノ辻周辺のメインストリートは一時ゴーストタウンと化した。

コロナ禍の影響でゴーストタウン化した町内（5月）

五月の連休明けから一時は落ち着きを取り戻したかに思われたが、新型コロナウイルスの感染拡大は歯止めがかからず、半世紀ぶりとなる東京オリンピックも延期されるなど非常事態に陥った。

毎月の例会は蜜を避けるため休会、会員が一番楽しみにしている大橋先生の講座も開催出来なくなるなど、予期せぬ年になった。四月二日の古窯跡見学を最後に、七月までは外出自粛の生活が続いた。

八月から古窯跡見学と有田八十八ヶ所札所巡りなど、コロナ対策を行いながら無理のない範囲で屋外活動を再開したが、参加者の少ない活動になった。四月より「史談会通信」を作成、活動報告を兼ね会員へ発送した。

新年度もしばらくの間は現在と同じ状態が続くと予想されるが、コロナワクチンの供給が開始され収束に向かうまでは油断することなく、各自体調管理に努めながら感染防止に万全を期して元気な姿で再会したい。

2020年度活動報告

4月2日　古窯跡の見学（黒牟田地区）
4月28日　史談会通信・No.001
5月20日　史談会通信・No.002
6月27日　史談会通信・No.003
8月6日　古窯跡の見学（黒牟田・応法）
8月8日　史談会通信・No.004
8月22日多久市郷土資料館開館企画展
　史談会より3名参加
9月14日　史談会通信・No.005
9月30日　古窯跡の見学（丸尾・戸杓）
10月5日　有田八十八ヶ所巡り
10月8日　史談会通信・No.006
10月29日　古窯跡の見学（泉山・山内）
11月9日　有田八十八ヶ所巡り
11月10日　史談会通信・No.007
11月26日　古窯跡の見学
　（中樽・上幸平・大樽）
12月1日　史談会通信・No.008
12月23日　古窯跡の見学（白川・幸平）
1月1日　史談会通信・No.009
1月14日　有田八十八ヶ所巡り

※町内でのコロナ感染拡大をうけ、以降見学会等は自粛・延期になりました。

史談会通信
4月～12月発行分

古窯跡探訪

坂井勝也

古窯跡探訪が昨年四月二日の第一回を皮切りに、十二月には第六回が実施されました。

第一回目は有田消防署に隣接する清六ノ辻一号窯跡、清六ノ辻大師堂横窯跡、清六ノ辻二号窯跡を見学後、私が寝言のように言うので案内者の大串さんに小溝下窯跡、小溝中窯跡、小溝上窯跡を案内して頂きました。李参平が有田で最初に磁器を焼いた窯跡と言われており感激でした。

古窯跡は全部町の史跡で自由に見学出来ると思っていましたが、個人所有が多く土地所有者の承諾がないと見学できないこと、国史跡でも土地所有者の承諾がないと説明の標柱や説明板が設置できないとの説明を聞き驚きました。

十二月は白川・幸平地区の見学でしたが、谷窯は深川の私有地ですが、三上次男先生を団長として、大橋康二さん、尾﨑葉子さんが発掘調査に携わっておられます。大串さんより、古窯の中で一番手入れが出来ていると言われ、私が一番大事にしている窯跡なので嬉しく思います。窯跡によっては、かやが生い茂っている急斜面のところもあり、運動不足の私はフラツクこともありますが翌日は元気はつらつです。案内者の一人、吉永さんは八十六歳とのことですが、七十代の私よりも足取りも軽く探求心いっぱいです。人生一〇〇年の時代、自分の好きな趣味を持ち、同じ趣味仲間を持つことがいかに人を生き生きと居させるかということを実感いたしました。令和三年度も吉永さん、大串さんよろしくお願いいたします。

2020年10月29日　楠木谷窯跡（泉山）にて

岩谷川内の読み方

前田順三

数年前、会社である書類作成の仕事をしていて、一人一人従業員の在所を書き、その住所の振り仮名をパソコンで打つ作業をしていた時のことです。「岩谷川内」に住んでいる従業員のところに来た時、ん？正式には「イワヤゴウチ」かな？「イワヤガワチ」かな？と思い、インターネットの郵便番号検索で調べてみました。そうしたら、なんと「イワタニガワチ」となっていました。地名の読み方は重要ですので、「日本郵便」はもちろん掲載時にはきちんと調査・確認をしていると思いますが、なぜ「イワタニガワチ」となったのか？

『有田町史』、『佐賀県の地名』（平凡社刊）では、旧地名が「岩屋河内（川内）」であり、私が子供の頃は「イワヤゴウチ」と言っていたので、それを「岩谷川内」と書くようになったことについては、多くの方に同感していただけると思いますが、読み方が「イワタニガワチ」で罷り通ってしまうと、致命傷（地名傷）になりかねない。

岩谷川内（いわやごうち）

有田で陶石が出来た運の良さ

鶴一樹

まず断層がある。大町断層。杵島炭鉱から佐世保線に沿って西に進み、高橋の川上のところで切れているが、おそらくここから小石原、大川内山を通り腰岳をくぐり伊万里湾に抜けていると思われる。いろいろな方面から圧力が加わったが、なかでも海底に堆積していた背振、天山山塊の隆起に影響され、火山岩が流出した。有田では英山から流紋岩。腰岳では黒曜石、真珠岩。青螺山では安山岩。西岳では玄武岩。褶曲、断層のずれで複雑に各方面から圧がかかりよじれ崩れる。そんな中で、マグマが絞り出され溶岩となったのだ。

有田の流紋岩は、二四〇～二九〇万年前地上にひねり出された。珪素分が多いので、流れずドーム状もっこり型。どういうわけか上部にかぶせた状態でずっと時を重ね、二一〇万年前温泉作用で、泉山、大川内、吉田山は、循環してきた熱水二六〇～二八〇度に洗われ、不純物（鉄、イオウなど）が取り除かれ、石英、セリサイト、、カオリンという鉱物を含む岩石となった。珪酸分の比率がより多くなった結果、白い陶石となり、泉山で李参平さん達に発見され有田で磁器が誕生した。饅頭で言えば陶石は「あん」で、うまい所の中身だけ食べ尽され、残ったのは皮だけになった。これが現在の泉山磁石場である。

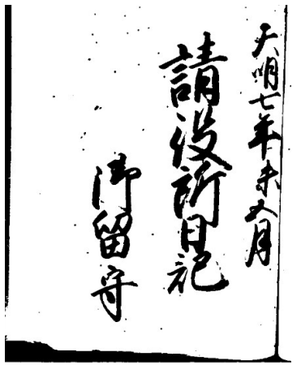
蓮池藩「湯岳皿山」

中原　康

もう三十年以上も前のことになる。大学では近世史(江戸時代)を専攻し、佐賀藩の陶磁器業について卒業論文を書こうと決めて、当時は県立九州陶磁文化館副館長だった前山　博先生に相談に伺った。

先生からは「どうせならあまり手を付けられていない佐賀藩支藩蓮池藩の陶磁器業について調べてみたら?」とご助言を頂き、半分宝探しの気分で資料が所蔵されている県立図書館郷土資料室通いが始まった。

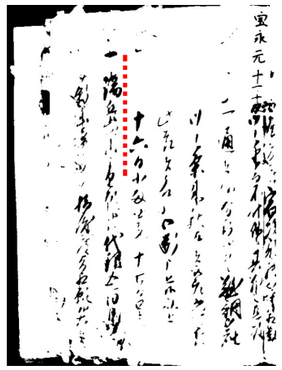
図書館には蓮池藩の元禄十六年から慶應二年までの「請役所日記」原本があり大学の長い春休み・夏休みを利用して膨大な量の日記から陶磁器業関係の記事を探し出して写真に撮った。近世史専攻にもかかわらず古文書のくずし字を見ると頭が痛くなるほうで解読には前山先生さらにはゼミの先生にまで援けを請うた。



「請役所日記」原本

その成果として卒業論文を書き上げることができた。

前置きが長くなったが、蓮池藩「請役所日記」中の陶磁器業関連の記述で頻繁に出てくるのは吉田皿山（旧：嬉野町）と志田西山（旧：塩田町）である。しかしこの二つの皿山とは別の名前の皿山が一箇所出てくる。それが宝永元年十一月十六日の「湯岳皿山」である。


「湯岳皿山」

私の解読が間違っていないという前提で話を進めていくが、「湯岳」は現在の嬉野市西吉田地区に存在する地名である。西吉田地区は棚田や段々畑が点在する農業地帯で幕末の蓮池藩領の絵地図を見ても蚕が這っているような登り窯は見当たらない。

宝永年間は絵図が示している幕末の状態からすると、一〇〇年以上前なので存在したとしても埋立や開墾などで窯場の痕跡がなくなったとも考えられる。すぐ近くに皿屋地区（吉田皿山）があるが、ここと混同して「湯岳皿山」と書き間違えたと考えるのは無理がある。

果たして「湯岳皿山」は存在したのか?しなかったのか?三十年以上たった今もわからない。

ちなみに旧：嬉野町にはもうひとつ謎の「皿山」がある。佐賀本藩領ではあるが長崎県境俵坂峠に近い皿屋谷地区の、文献資料がまったく見つかっていない一六〇〇年代末まで稼働した「不動山窯跡群」である。

水碓　江戸時代は何といっていたの?

栗山愼悟

有田の川底の岩盤には、陶石を粉砕するための水碓を設置した穴が至る所にあいている。

水碓は、「てこ」の原理を応用し水力を利用して陶石を粉砕する碓である。昭和十一年に刊行された『肥前陶磁史考』には、水碓にからうすの振り仮名があることから、昭和の初め頃はからうすといっていたことがわかる。また、現在はからうすと呼称して唐臼の文字を当てたりもする。

しかし、江戸時代の呼称はわからない。

享保十六年（一七三一）に刊行された『皿山雀』には、『前段略・・。扨此泉山の左右にわかれて川有。水からうすをもうけて日夜うすつく音絶ず谷々に余多あれど泉山の水碓と題して面皮あつくつづり置き候。・・』とあり、水碓を水からうすと書いていることから、江戸時代は、みずからうすといっていたのではないだろうか。

国語辞典には、『碓』は、うす・からうす・ふみうす・足でつく仕掛けのうす。『唐臼』は、臼をうずめ、「てこ」の仕掛けをした杵の柄を足で踏んで米などをつくもの。とあることから、『水碓』は、臼をうずめ、「てこ」の仕掛けをした杵を水力で上下させ陶石を砕くものであることから、水碓はみずからうすと読める。

『肥前陶磁史考』は、中島浩氣が昭和十一年（一九三六）九月に刊行した、有田にかかわる歴史・陶業・制度等を著わした書。有田町の陶磁史研究の必携の書とされる。

『皿山雀』は、享保十六年（一七三一）に刊行された、有田皿山の事をつづられた書。

伊万里大川内山の唐臼

私的考察

井手邦男

令和二年十月に開催された九州陶磁文化館の寄贈記念・特別企画展「柴澤コレクション」では約千百点ほど寄贈された焼物が展示されていましたが、このようにコレクション全部を揃えて一同に展示することは今後無いと言われています。

染付花唐草文の小皿：砂目重の焼物が七点展示されていました。以前から柴田夫妻コレクションとして展示されていたものはこの中の一部だと思いますが、一枚だけ展示されていたのを記憶しています。この焼物は五枚ずつ重ねて焼かれたと思います。一番上の皿は現在見当たりませんが、これが揃えば最高の焼物になるだろうと思っています。

一六八〇年以降の焼物は現在の焼物のデザインの方が当時の焼物より優れているように見えました。それは惜しみもなく時間をかけて絵が描かれています。当時は機械や道具が不十分な中で描かれていることを思うと描かれた能力に凄さを感じました。

一八二〇年代からの染付捻桜花流水文小皿を見つけました。その皿が鍋島藩窯の木杯型（約五寸）の皿によく似ていて、何故ここにこの形状があるのか?　有田焼のデザインであることが不思議に感じました。

この器は新潟に移りわたり新潟県出身である柴澤さんの手に入ったのではないだろうかと、勝手に私は考えています。

私的考察—その一

有田町歴史民俗資料館にある資料（皿山の人物　-知北万里）の中に、副島勇七という人物のエピソードが次のようなことが書かれています。

『有田皿山で窯業に携わる者のうち、より優れた技術をもった者は、献上品を焼くために鍋島藩へ引き抜かれていきました。ここでの職人の生活は高度な技術の漏洩を防ぐために、皿山よりさらに厳しい規制が強いられていたと言われています。

—中略—

ここで生活する職人の中に、副島勇七という優れた名工がいましたが藩窯での生活に不満を持ち、その態度は周囲の目に余るものがありました。勇七はたびたび謹慎を命られ、隣村の正力坊へ幽閉され、生活が困窮したため脱走を企てました。勇七ほどの名工が藩外へ行けばとたんに同じように優れた製品が出回り藩の焼物の価値が下がってしまいます。

勇七が砥部、九谷などを転々としたらしいことは分かっても消息がつかめなかったのですが、数年後瀬戸焼の中に有田とそっくりの図柄を見つけ出し、伝え聞くうちに瀬戸で勇七らしい人物が見つかりました。

藩の役人、小林傳内は長崎の呉須売りに変装して勇七が潜伏しているらしい瀬戸の粂八窯へいき、主人に呉須を売ります。主人は呉須の良否の判別がつかないので、奥にいる勇七のところへ持っていき、それが唐呉須の良品であることがわかると、商談を進めようとします。

ところが、傳内は奥で安物の呉須とすり替えられたといいがかりをつけ、大変な言い争いになります。奥で様子を聞いていた勇七が思い余って出てくると、顔見知りである傳内にその場でとりおさえられました。佐賀へ護送された勇七は、佐賀郡嘉瀬の刑場で処刑され、伊万里の鼓峠で梟首にされたといわれています』

※一部省略し要所のみ掲載

この逸話のように、本来なら藩内で守られるはずの作品が、何らかの事情で流出したことによって、本来出るはずがない場所から出てきたのではないだろうか?　と私は勝手に推測しています。

私的考察—その二

有田町歴史民俗資料館にて「足元に眠る　有田焼工房を探る!　泉山一丁目遺跡・中樽一丁目遺跡発掘調査報告展」が開催されました。

その展示品の中に木杯型の鍋島によく似た五寸皿が展示されていました。その皿には櫛目高台と三方には七宝文様が描かれています。中身は有田焼のデザインが描かれていて、それが四枚（破損はしていますが）出土したものとして展示されていました。

泉山や中樽の遺跡の中から出土したものだと言われていますが、何故鍋島絵柄と同じものが四個も出土したのか?　私の勝手な考えでは、職人としての技術が低下したり、年老いてしまった人たちが有田へ戻ってきて、その人らが勝手に真似て作ったのではないだろうか?

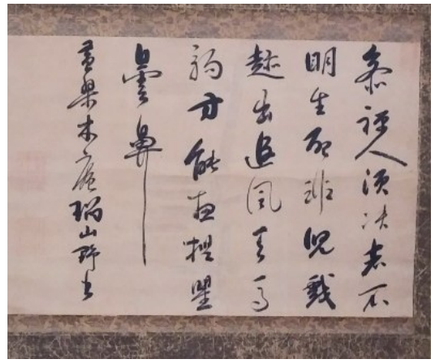
また、作った商品を北前船で新潟方面へ出荷したのだとしたら?　作ったものの藩への謀反とならないように破棄したのでは?　などと自由な発想を巡らせたりしています。

古物の誘惑

山口信行

中年から骨董にはまり出したら、「一生そこから逃れることが出来ない」などという言葉を聞かれたことはないでしょうか。そうかも知れないなどと思いながらも、確かに古いものに今でも惹かれてしまう自分がいるのは事実である。古伊万里を中心とした古いもの、それらが好きになると自然と蒐集し出すこととなる。特に意識しなくても、好きなものがあるとつい値段と相談して、つい手元に置きたくなる。古伊万里に限らない。例えば入った骨董店に山水の古い掛け軸があったとしよう。

あ、いいなァ、この山水。描き方。自分好みの雰囲気を持っている。部屋のあそこに掛けたらイイんじゃないか等と想像して、作者は?、値段は?と尋ねる。無理して後ででも買えそうと思ったら、買約して後ほど購入する。出来たらその購入画家の所属、例えば○○派に属しているか等と分かれば、その特徴などを後で書物で調べるのもまた楽しいのである。それがきっかけとなって、一般の市販の美術本なども読んだりして、ますます興味が広がっていった。そうなると、古美術を展示されている美術館などへ自然と足が向き始めることとなる。


掛け軸「黄檗二世、木庵書」

近くで一番足しげく通った美術館は福岡市大濠にある福岡市美術館である。そこに古美術展示コーナーがあり、季節ごとぐらいの周期で展示替えがなされていた。また電力の鬼と呼ばれた松永耳庵の「松永コレクション」は非常に魅かれるものがあった。近代絵画では久留米市の石橋美術館。『海の幸』等で知られる青木繁をはじめ有名な画家の作品が常設で見られた。残念なのは、現在この作品等はこの生誕の久留米を離れて東京のブリヂストン美術館に引き上げられたことだった。出光美術館は以前は福岡市にあったがこちらは逆に出光佐三ゆかりの北九州の門司へ移った。古唐津の蒐集品等は見事だったが、いずれも福岡より遠くなってしまったのは残念であった。

自宅に「書画骨董のみかた」の修了書を入れた額を掲げている。

今から十八年前に佐賀県立博物館・美術館がそのセミナーをやると新聞か何かで見て即申し込み、陶磁器はじめ、書画、刀剣など古美術全般の基礎知識を学んだことがあった。

有田から佐賀まで週一回の割で、三～四回にわたり通って学んだが、全てに興味があったのでとても充実し楽しかった。思うに、その講座の場には古美術を扱う業者さんもかなり見えてたんじゃなかったかと思う。掛け軸の紐の結び方はそこで習ったが、どうやら今でも身についてるようである。

あゝ、そういえば、九陶でも随分前になるが、毎年一月に、「古陶磁に触れる」という催しがあった。予約制でその後有料となっていたが、当初は無料だった。そこで学んだ一つに焼物を入れる木箱の紐の結び方があったが、これも今でも身についた、ほんのちょっぴり自慢出来る指技である。学芸員のFさんから習ったものだった。

趣味の染付

中村貞光

染付は素焼きの生地に呉須(コバルト)で絵付けを施し、その上から透明釉をかけて高温焼成(約一三〇〇度)すると藍青色に発色する。中国では「青花」とも呼ばれ、元時代の十四世紀に景徳鎮窯で創始された。

染付磁器は、朝鮮を経て日本へ渡ってきたが、朝鮮陶工によって磁器焼成の技術がもたらされた当時の朝鮮では白磁の磁器が殆どで、「朝鮮王朝実録」という李朝時代の歴史を記録した書物には、十五世紀に染付磁器を作った痕跡が記されていて、作る努力はしていたらしい。

日本で初めて磁器が誕生する有田での染付は、中国の技術が色濃く反映して今日に至る。白磁に呉須で描き焼成された染付磁器は、色絵磁器と比べると質素ではあるがシンプルで美しい。

帰省直後は染付の意味さえ知らなかった私が最初に絵付け体験をしたのが、観光ガイドとして惣次郎窯を訪れた折のことだ。小枝に停まった雀を五寸皿に描いた。

本格的?に描き始め五年半が経ったものの、気が向かなければ描かないので本格的などと言えるものではないが、自宅玄関の壁側に作った棚には「趣味の染付」の自作の看板と共に、染付の作品が「我が物顔」で鎮座している。

デンドライト

馬場正明

写真は一体何でしょう? そう! 下の方に薄く鉛筆で答えの(陶石)が見えます。有田歴史民俗資料館に天草石と並べて常設展示されていた泉山の陶石です。

改めてその表面を見ると、まるでシダの化石があるように見えます。ただ、泉山陶石の出来た過程を見ても、三〇〇〇万年前日本列島が出来た頃の砂岩・頁岩(けっがん)など堆積した杵島層群の上に、二五〇万年前に有田流紋岩が噴出堆積、同時に噴出に至らず、堆積岩中でドロドロのマグマが大きな塊状に冷え固まり、この塊が二一〇万年前に熱水によって陶石化したものと考えられており、陶石がシダなどの植物の化石と同じ場所で出来るとは思われず、このシダの様なものは何かと、もやもやした日が続きました。

泉山陶石(有田町歴史民俗資料館)

そんなある日、武雄の図書館で岩石の図鑑を見ていたら、伊万里新天町で見つかった「流紋岩の表面の樹枝状マンガン」と資料館の泉山石と同様の模様があり、「しのぶ石—樹形石(デンドライト)一見するとシダの葉の化石の様に見えます、これは岩石の割れ目にしみ込んだ酸化鉄や酸化マンガンが沈殿したものです」と記されていました。

そこで、さらに、ネットでしのぶ石、デンドライト(樹枝状晶)、のキーワードで調べると、デンドライトとは「複数に枝分かれした樹枝状の結晶」を言い、そのでき方は「一般の結晶の成長では結晶面の欠陥部が優先して原子を取り込み、結晶面に凹凸のない単純な構造と成るのだが、デンドライトの場合は、過冷却状態あるいは飽和状態の液体から固体が析出するとき、種結晶の周りにある液体から結晶表面への原子の吸着が急激に進み、種結晶の欠陥部分を埋めるだけでなく、結晶表面のどこにでも付き、確率的に、表面の凸部分に付きやすくなり、表面の凸部分がどんどん成長して真っ直ぐ伸び、その先端はちょっとしたきっかけで枝分かれしていくので、結果としてデンドライトのような一定の規則性を持った構造になる」とあります。

泉山陶石の生成に当てはめると陶石化した石の表面にはいろんな金属(陶石の化学分析によると、チタン、鉄、マンガンなど)を溶かした熱水があったはずで、これがデンドライトとなったに違いなく、これで模様の正体が酸化マンガンだろうと思いますが、樹枝状部分の化学分析等の詳しい資料があればいいなあ～と思います。

泉山陶石　部分拡大

目からウロコ

吉永　登

昨年十一月から十二月まで、有田町歴史民俗資料館で開催された企画展「足もとに眠る有田焼工房を探る!」は、まさに目からウロコの画期的な調査報告展であった。

発掘調査の対象となった泉山一丁目遺跡は、平成二十五年から二十七年にかけて、県道泉山大谷線の街路整備事業に伴い町の教育委員会が実施したもので、中樽の遺跡からは、十七世紀中頃から十九世紀に至る有田焼の工房跡が四軒ほど、泉山遺跡からは陶石から陶土を作る明治期の水簸施設が完全な形で見つかった。

企画展では調査概要や発掘道具と共に工房の歴史的資料が分かりやすく提示された。中樽遺跡のコーナーでは町内発出土の釉薬粉砕用の踏み臼(唐臼と異なり人力を用いた)の底石や、ろくろを設置したクルマツボの構築部材が、泉山遺跡から出土した水簸施設を構成した板などと共に展示されていた。

また、陶磁器類は、年代ごとや特徴別に分類されていて、これらの工房で加工された製品は、泉山や中樽の登り窯で本焼されたものと推測される。

今回の企画展では、江戸時代後期に作られた佐賀県重要文化財指定の「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」でしか見ることが出来なかった当時の有田焼工房の実態が、考古学的な手法で明らかにされており、まさに「目からウロコ」の体験であった。

県道泉山大谷線の街路整備事業という千載一遇のチャンスを逃さずに精力的に発掘調査を実施された資料館スタッフの努力に深く敬意を表したい。

泉山一丁目遺跡

暗黙のメッセージ

「小溝上窯で発掘された皿の暗黙のメッセージを読み解く」

鶴美百合

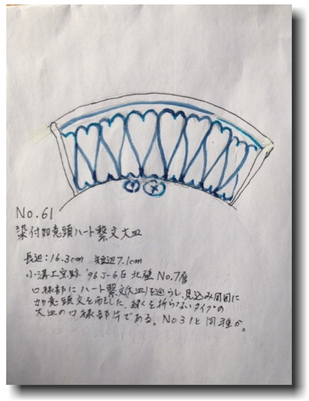
「うむっ、こっ、これは、なんと、♥型の繋（つなぎ）文大皿？ではないのか？！！と、鍋島のお殿様が気が付いたのか、気がつかなかったのか、今は知る由もありませんが、このような繋の♥型の写真を見つけたのは、今年七月に出版された、村上伸之先生著「伊万里磁器の創始窯　小溝窯出土陶片」の本の中の写真です。ほんとうに、これでもか、というほどの♥繋文の陶片が出土しています。そして、村上先生は、有田窯の創始窯というテーマで取り組まれています。

さて、小溝と言えば、今年の夏、史談会の窯元めぐりで訪れた窯です。思い出した方もいらっしゃることでしょう。そのころは、小溝はどうも古い窯跡らしいとは、まあうすうす思ってはいましたが、やはり、柿右衛門近くの天神森では優品が発掘されているところをみると、天神森窯跡のほうが「優勢ばい！」思っておりました。

それでは、ざっと、小溝の窯跡の復習をしてみます。ここからは、有田町歴史民俗資料館のホームページに掲載されていたものです。「小溝は1・2号窯が1600年代～1620年代、3～5号窯が1620年代～1630年代の操業と推測されます。遺物は、陶器と磁器が出土しており、陶器は灰釉の碗、皿、小杯、片口鉢、瓶、鉄釉の碗、皿、片口鉢、すり鉢、刷毛目の碗、皿、が出土しています。磁器は染付の碗、皿、鉢、小杯、瓶、壷、香炉、緒締め玉、青磁の碗、皿、香炉、鉄釉の碗、瓶、辰砂の碗や鉢が出土しています。」

さあ、どうでしょう？　まあ、多種多様な窯だとは思いますが、これだけでは、どんな絵柄が出てきているのか、さっぱり、見当もつきませんねえ。

ところが、先生の本での発掘した陶片の遺物の数々の写真を拝見、驚きの連続でした！これでもかというほどのおびただしい、♥型の意匠がで出てきたのです！！小溝上窯特有の大皿の口縁部に、♥型が繋がれている様子は、とても洗練されて、まるで一流のニューヨークのデザイナーが編み出したかの様なデザイン。



おお、超！可愛い、魅力的で、なんともいえぬ、エキゾチックで異国情緒をも感じさせるではありませんか！もちろん、ここ、小溝地区は、黒牟田（Cross Muta）の山辺田にも近く、今だに辺鄙なところです。

さて、いかようにして、このような奇妙な絵柄が、小溝上の陶工達によってもたらされたものであろうか？　調べてみよ！とお殿様。「ははっ」一体、いつ頃、日本にハートマークが入ってきたのであろうか？と、やもうなく、グーグルに、おお、でてきた。これも、ざっと、日本だけをかいつまんでみよう。やや、あの中学の社会の教科書に載っておる、有名なフランシスコ・ザビエルの肖像画ではないか、まるで、漫画のようだのう、赤いハートになんと湯気が出ているかとおもわれる赤いハートは実に奇妙なもんようのう。なるほど、十八世紀頃のキリスト教の伝来か、たしか、ザビエルは平戸に来て、宣教したのだったな。

ふむふむ。

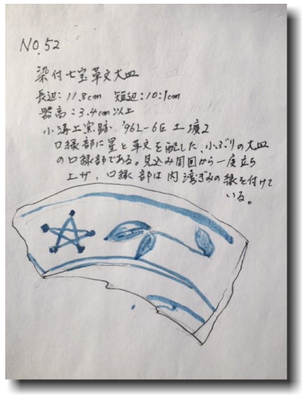
で、ハート型は江戸時代初期、十七世紀前半に作成されたと言われ、彼の左腕にもハートマークの絵が刻まれており、この時点でハートマークが日本に伝わっていることが分かると、ふむふむ、なるほどであるなあ。

さあ、私の意図をお分かりかな？ハート型は小溝上に住む、キリシタン陶工集団だったのではなかろうか？　はて、その根拠とは？　村上先生の本には、「日本磁器の創始は天神森の窯跡の皆無ではないものの、現状では製品組成からみると、小溝上で始まった可能性はがより高いのである」と。小溝陶工集団が、磁器の創始の可能性が高いとおっしゃるのだな？

遺物でわかるのは、「伊万里市の大川町の神屋谷窯跡や一若窯跡などに見られる鉄絵の描法や重ね焼きの際に砂目を使用することから、すくなくとも小溝窯跡の技術の一端は、こうしたいわゆる藤の川内周辺からもたらせていることが分かる」と「一若窯跡？や、や、や～っ！！

なんと！一若窯！それを見た時、もう私は、天にも昇るほど、喜びました。なぜか？それは、あの、たまたまぺらぺらとめくりあてたのが、史家中島浩気さんの「肥前陶磁史考」の113ページだったのであります。信じられません！

さあ、その内容の引用をごらんあれ、そこには、「一若のオランダ墓とあり、その横に一若といえる山裾の雑木を分け入れば、一樹の檜の下に古く埋し石碑の残骸があり之が即ち阿蘭陀墓である。いまより四百年以前において、蘭人二人此れ一若にきて一種の陶器を制作した。それは、そもそも唐津へ渡来せし者か、又平戸へ上陸せし者か、或いは長崎より来在瀬下のかまったく不明である」というのを発見！していたのです。



ところで、私は「阿蘭陀人」というところに喜んではいませんよ！当時では阿蘭陀人とは考えがたい、なぜなら、村人の伝承当時の、「阿蘭陀人」とは、ヨーロッパ人のことであり、禁教時代になり、出島にオランダ商館が移ると、村人は、すべてのヨーロッパ人を、オランダ人と呼ぶようになるからだという。ヨーロッパ人とは、イエズス会のポルトガル人、宣教師たちのローマ、スペイン人と思われる。しかるに、オランダ人が焼いた窯というのは、実際はオランダ人が焼いた窯とは当たらないという事。

お分かりいただけたかな？この伝承は、白石の方にも、スペイン人が焼いた窯があるというのがあります。

さて、♥型文様はいったい誰が？織田信長時代には、キリシタンは大ぴらにオーケーだったのだから、可能性はおおありと思われる。したがって有田のキリシタン陶工の暗黙のデザインではなかったのか？

古窯跡周辺の石造物について

大串和夫

日頃、古窯跡の文化財パトロールで町内を巡回していると、いろいろな石造物を見かける。これらは古窯跡にまつわる神仏に関するものや歴史上著名な人物に関するものなどで、そこでまず身近な自分が住んでいる地区（外尾山窯跡・外尾山廟祖谷窯跡）にあるものを調査すると、町内の古窯跡付近の石造物との類似点を見出すことが出来る。

古窯跡近くにある氏神様八幡神社周辺の石造物を列記してみると

一、山神

二、正一位稲荷大明神（建立年不明祠内）

三、稲荷大明神（二基　文化・天明年間）

四、大勢至（文化五年建立）

五、大神宮（安永四年建立）

六、庚申社（建立年不明）

七、天満社（天神社）（嘉永二年建立）

八、地蔵菩薩（昭和五年建立）

九、不動明王（二基　建立年不明）

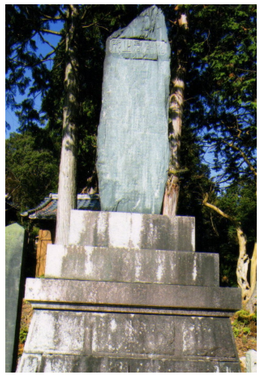
また、八幡神社西の峠には

十、金毘羅（文化十四年建立）

十一、開運南斗星（安政六年建立）

十二、妙法北辰妙見大菩薩（文政七年建立）などがある。また、神社下の大師堂には五体の石造物がある。（薬師如来・弁財天など）

さらに、大師堂下に高さ五㍍程の自然石で造られた顕彰碑があり、『松村君之碑』と刻んである。この松村君とは、外尾山窯焼（共同窯）の九人の中の一人で、初名は甚九郎といい、後年定次と改名している。明治二十二年の町村制制定に伴い、初代新村村長（明治二十九年に有田村と改称）で、明治三十八年まで十六年の長きにわたり村政に貢献された功績を称え大正八年四月三日に建立、大隈重信公の題額で、碑には武富時敏（明治・大正にかけての佐賀県の政治家）撰の詩が刻まれている。


大師堂下の松村君之碑

ここで、古窯跡付近にある石造物について考えてみると、外尾山古窯跡近くのもので分るように、山神（窯の神）、稲荷社（商売繁盛の神）、天満・天神社（有田では火の神）が設置されており、他の古窯跡も同様にこれらの石造物が江戸期には登窯の神として建立されたことを物語る。

最後に今後、古窯跡の文化財パトロールを行う際には、盗掘を監視すると共に石造物などの調査をしてみたい。

編集後記

コロナの感染拡大で始まった本年度は、会報作りを前倒しで作成したため、皆様には例年以上のプレッシャーを掛けてしまった。しかし予想を上回る投稿を頂き最終段階で紙面に収まり切れず、吾輩の原稿を新たに書き直すハプニングが生じ慌てたが、皆様のご協力のおかげで、昨年と同様八ページの紙面が出来上がり感謝したい。